

明治期東京の“疑似温泉”の興亡

——観光デザインの視点からビジネスモデルの変遷に着目して——

小川 功

The Rise and Fall of “Quasi- Spa Resort” at Tokyo in the Meiji Era: A Close Look at the Trend of Business Methods from the Viewpoint of Tourism Design

Isao OGAWA

要 旨：明治初期から中期にかけて東京の市内及び周辺各地に開設された“疑似温泉”を一種のビジネスモデルと捉え、どのような種類の観光業者がいかなる意図で斯業に相次いで参入したかを観光デザインの視点から考察することとした。先行研究の蓄積もなく、残された史料も乏しいため、多くは観光案内書の記述と当時の新聞記事に依拠せざるをえなかった。しかし、“疑似温泉”には温泉系のほか、薬湯系、海水系、人造滝系の4業態が存在し、おのおの異なるビジネスモデルであること、業態ごとに規模、資金力等にかかなりの差があり、その中では温泉系から順次改善され、温泉と料理さらに旅館を兼営する総合温泉型がもっとも完成された観光デザインとして比較的長く持続できたことなどを今回明らかにした。しかし観光資本としての脆弱性は避けられず、本物の温泉旅行を安価に可能にする鉄道網の発達等に伴って大半の業者は明治末期までに淘汰され、ごく少数の「温泉料理」系の有力店のみが大正期まで営業できたものと推定される。ただし近年のヘルスセンター、健康ランド、スーパー銭湯等との系譜の連続性の有無に関しては今後の検討課題として残った。

I. はじめに

筆者は本稿執筆中に、東京湾岸にある広大な健康ランドの一つを訪れた。この施設の戶外エリアには著名な温泉の共同浴場を模した古色蒼然たる建物や、別の著名な海上温泉を彷彿させる洞窟風呂などが多数デザインされており、あたかも自分が昔遊んだ懐かしい名湯の中で湯浴みしている錯覚に陥り、しばし浮き世の憂さを忘却できた。一般には近年の所産と理解されているこの種の温泉類似施設（＝疑似温泉）の発祥は実は近世以前にまで遡及できる。庶民が本物の温泉に簡単に行けなかった明治期に「庭園広く築山泉水等宛ら天然の趣を備へ」⁽¹⁾、「熱海や草津などの天然に湧出する温泉場の趣向にこしらえ」(18.10.24時事「梅花軒」記事)、恰も「本とうの温泉場のやうに」(9.3.10②「真治軒」記事)似せるべく「種々の工風を凝し」(24.12.14②)た結果、筆者が体験したのと同様に「仙境に遊ぶの心地すとして頃日来客頗る多き」(25.9.2③)と報じられた。筆者は「熱海や箱根を圧してしまふ目論見」(11.6.29②)でデザインされたこの種の代替性観光施設（下級財・劣等財）の全体をとりあえず“疑似⁽²⁾温泉”と総称しておきたい。疑似温泉のデザインには考案者・創始者の一人である紋左衛門⁽³⁾が当時「市中の閑居の山家に倣へ」（浴場、p111）ていたことから、その根底に茶室のデザインと同じく「市中山居」⁽⁴⁾のコンセプトがあったものとする。

都市住民が湯治を“疑似”体験できた施設の様子を視覚的に理解できる明治期の絵や写真を最初に示しておきたい。まず「玩具絵の芳藤」として知られる浮世絵師・歌川芳藤の描いた[写真-1]「流好温泉の景 吉善板」⁽⁵⁾は猫を擬人化した戯画であるが、温泉ブームの最中の疑似温泉の内部をわかりやすく図解したものである。「ポンプ」との温泉場がどこかは未詳だが、当時の有名な温泉が素材に選ばれたであろう。ガス灯が点灯された玄関には下足番がいて、案内された客はまずお茶を一服後、本場から取り寄せた温泉に入り、離れの湯滝を体験。湯治客が浴後2階で料理を

賞味する様子までネコが演じる。21年の温泉探訪記でも「温泉の門前には必ず何々温泉と記せし大標札あり。客来れば婢先つ迎ひて入らっしゃいましの一語を以てし、直に煙草盆と敷物を携て座敷に案内…該場には温泉名を染貫し浴巾あり…一浴…座敷に来れば茶既に座にあり」(写真、p101)とある。絵と記事から当時の温泉の接客ぶりがわかる。

[写真-2]は東京近郊「大森字森ヶ崎 鉱泉旅館森浜館」⁽⁶⁾の明治末期の開館当初の絵葉書である。市内温泉の適当な写真が得られず、時期もやや遅いが「鉱泉宿にして割烹を兼ね」(日本、p265)た森浜館で代用した。門の洒落たランプは流好温泉とも共通する。当館は「静雅なる海岸の鉱泉浴場にして頗る眺矚に富む。庭広く四百余坪の池水碧を湛へて数百の鯉魚遊泳す…鉱泉浴あり。白湯の設けあり」(近郊、p104)と紹介された。



写真-1 流好温泉の景 (浮世絵)



写真-2 森ヶ崎鉱泉森浜館 (絵葉書)

II. 東京の疑似温泉の概要

薬湯、新温泉、潮湯、沸かし湯、人造温泉、人工温泉、市内温泉、市中温泉、再生温泉等と様々な名称で呼ばれる、本物の温泉とはやや距離を置く業態が存在する。多様な名があるのは観光研究の常として別々の分野で行われ相互に擦り合わせがないほか、微妙な業態等の差もあるためと考えられる。たとえば橋爪紳也氏は「市中温泉」の語を用いて以下のように的確に要約している。「東京には明治のはじめの頃、『市中温泉』の流行があったという。そのはしりが明治五年、深川仲町で営業を始めた『箱根七湯』である。ここでは湯本から湯の花をとりよせて、薬湯として人々の利用に提供したという。以後…かつての江戸の外縁にこの種の「温泉」が開かれ…風光明媚な温泉場の雰囲気を再現してくれる「温泉」は、薄暗い従来の湯屋に慣れていた庶民にとって驚きであった。遠くの名湯で湯治する気分を、近郊の温泉風呂で即席で味わえるという趣向と、健康によい薬湯の評判が手伝って、おおいに人気を集めた」⁽⁷⁾

筆者は土地会社、温泉会社等の研究に加え、東京での個別事例研究として向島有馬温泉、東京本芝浦鉱泉⁽⁸⁾を手掛けたが、こうした東京の疑似温泉を当時流行のビジネスモデルとして捉え、どのような人物がどのような意図で着想したか、創始から滅亡に至る全体像を「観光デザイン」⁽⁹⁾の変遷として俯瞰してみたいと考えた。たとえば当該ビジネスモデルの考案者を意味する「元祖」を名乗った駒込草津温泉主人・藤谷は「正真草津温泉所は当府下中私方及び

京橋桶町十九番地支店の外、一切無之筈の処、近來通常薬湯の如き者に草津温泉と名けて開店致候者之あり候へ共、右等は悉皆偽名に御座候間、御入浴の御方は能々御注意可被下候」(13.6.18④)と混同を注意し、自己モデルの独自性を主張した。伝承によれば明治5年藤谷家初代(甚四郎)に大黒天からの「御告げがあり、早速草津温泉に立ち寄り、湯の花を持ち帰って温泉割烹を始め」¹⁰⁾草津温泉元祖を名乗った。養子金兵衛が19年浅草、南茅場町にも開店、「温泉は駒込草津温泉の支店にて、本店同様温泉の傍ら料理もする」(19.6.15③)チェーン展開を行った。

筆者はかつて大正バブル期の泡沫企業を対象に『虚構ビジネスモデル』¹¹⁾を著したが、今回は藤谷系にみられたような東京地区の疑似温泉のビジネスモデルの創出・改良・発展・競合・衰退、滅亡といった変遷過程を筆者なりの観光デザイン視点から探求しようという試みである。

統計が完備した鉄道など免許業種とは異なり、明治初期の観光研究は史料も研究蓄積も共に十分ではない。ほぼ唯一の書籍として『公衆浴場史』の中に「再生温泉」の項目があり、本稿でも同書に負う所が大きい。しかし必ずしも十分な事例が収録されているわけではないので、本稿では当時盛んに刊行された東京の観光案内書のほか明治前期の新聞を素材として新に事例の探索を開始した。幸いにも東京の世俗記事に紙面を割く『読売新聞』は『小学雑誌』に「東京の温泉と飛泉づくし」(9.8.28④)を寄稿した高島藍泉¹²⁾など、紹介した温泉を「其内記者も養生がてら見にゆくつもり」(8.11.29①)と温泉好きな記者を擁し、関連記事が比較的豊富であった。なお本文中にことさらに具体例を列記したのは、誇張・憶測等が避けられぬ当時の新聞記事の限界を考慮し、多少なりとも客観性を担保しようと複数例の併記を心掛けたゆえである。

Ⅲ. 疑似温泉ビジネスの分類

東京の疑似温泉の業態上の分類として次の四区分が考えられる。18年の『東京御養生区分温泉一覧』表紙には版元の三盛堂が営業主に贈呈した「薬湯、海水さん 温泉一覧」との暖簾が描かれている。『温泉一覧』の主なターゲットたるa「温泉」系のほか、b「薬湯」系、c「海水」系、d「人造滝」¹³⁾系の四業態が存在し、出版者の今井栄蔵はa～cを「御養生区分」として収録した。その結果総計165店中筆者なりの分類ではa「温泉」系73店(うち実在の温泉名31店、その他42店)、b「薬湯」系67店、c「海水」系25店が掲載された。この他「断に付除名」として途中で温泉名を原版から削除された2店(元祖草津の湯、新坂下の温泉志保原と推定。有力両店は見込掲載に支払拒絶か)があるので、18年時点で東京には少なくとも「御養生区分」167の店舗の存在が確認できよう。

167店の観光業者のビジネスモデルは以下のように三系統に整理できるであろう。

1. 薬湯系のビジネスモデル

もっとも古い業態である薬湯系のビジネスモデルは(1)在来の湯屋でも特定の時節に実施していたほど最も転換容易な業態で、(2)湯屋の設備に改良を加えず、単に人参等の薬草、薬剤の添加のみで済む。(3)健康志向の顧客にアピールすべく名医等の指導・調剤が肝要。(4)薬草、薬材の変更により、銘柄変更・模様替えや他店との差別化が容易。(5)白湯の湯銭よりも薬効に応じた付加価値を販売価格に上乗せできるなどである。「菖蒲や柚の費用にあてる為に、規定の湯銭よりは一銭でも二銭でも余分の銭を包む」(湯屋、p33)という近世以来の風習があり、相応の薬効があれば割高な湯銭も許容される土壌があった。

2. 海水系のビジネスモデル

石井研堂の指摘するように10年代前半の東京「市内温泉の流行が数年にてさめ果て」(起原、p1227)た15年ころから「悪疫流行の頃といひ、暑さの時分ゆえ、養生と涼みを兼ねて」(15.7.14②)、新たに「市内海水温浴」ブームが勃興、在来の湯屋でも「白湯を海水浴に変更」(24.12.14②)する動きもみられた。これは当時国が衛生政策の一環として海水浴を推奨し、普及に努めたことが大きい。14年には「海水浴説」と題する啓蒙的論文が発表された。著者と目される長与専斎は15年二見浦、17年由比ヶ浜の海水浴場開設に関わった。また松本順も8年9月蠣殻町目越前邸内に自己の調業する薬湯を開業(浴場、p111)させるなど、薬湯と海水浴の普及に貢献し、こうした医師団の海水浴推奨が海水系ブームをもたらした。小口千明氏は「東日本に位置する潮湯は少ない」¹⁴⁾と潮湯偏在性を主張されるの

で、この東京市内での時ならぬ潮湯ブームは観光経営史上も注目されてよい。

海水系のビジネスモデルは(1) 薬草、薬材に代え、浴槽に海水を投入する軽易な転換であるが、(2) 塩分での金属腐食上、浴槽等の改修が必要。(3) 大量の海水輸送のための輸送費が必要。(4) 近隣から海水が得やすいためか「東京にては芝浜に、木挽町に、浜町に、桶町に、尚ほ追々開業」(17.6.14②) するなど臨海部での立地が目立つ。(5) 泉質上海水には大差がなく他店との差別化が困難などである。

単に「海水浴」という店名が多いのは町名のみを付した江戸の湯屋名の伝統ではあろうが、町内だけで遠方からの客が少ないことを暗示しよう。また『公衆浴場史』は単に「一般浴場に『塩湯』のノレンが掲げてあった」(浴場、p116) だけと解するが、収録の証言者は「札の辻の汽車と岡との間に塩湯があって、お台場の方から汲んできて、遊女のサービスで料理なども出た」(浴場、p116) と潮汲みの事実を記憶する。また飯田町仁泉亭の広告も「品川沖…二里内外の海水を汲取浴場を開き」(16.9.13④) と汲取地点を明記した。

薬湯系と海水系は共に既存設備が転用でき、従前の客層に新規を加え普通より割増の湯銭を徴収できるので業態転換の負担が軽く零細業者向けの恰好のビジネスモデルであった。その反面参入が容易で、差別化に限界があるため競争激化を招きやすく、さほど発展的なモデルとは考えにくい。そんな中で海水系の吾妻橋千昇亭は同時に「海水温泉並に手軽御料理開業」(17.7.12④) した例であり、また金杉新浜町芝浦海水浴は「清潔なる海水浴にして新鮮なる空気…活魚の美鮮…旅宿を兼業したれば宿泊するも差支へなし」(金子、p148) と料理・旅館を兼ね発展した数少ない例であろう。店名の「海水浴」は今日の「海水浴場」の意ではなく、「海水系」温泉施設に相当する。

3. 温泉系のビジネスモデル

『公衆浴場史』は明治初年「当時、温泉のことを薬湯と呼んでおり」(浴場、p133) と、江戸の薬湯＝〈再生〉温泉説を踏襲している。筆者は明治期の薬湯系＝薬草・薬材系と狭義に解し、別に温泉成分を含むものを温泉系として独立させている。この結果「人参湯を廃し、伊香保より湯の花を取り寄せ…営業改良」(17.4.8③) した横浜東耘楼は筆者の分類では薬湯系から温泉系へ転換したものと整理できる。温泉系の提供する、至れり尽せりの顧客サービスのビジネスモデルは以下のように経営者の才覚や、立地条件等により追加し得るオプションが多種多様であり、新しいビジネスモデルを次々と創出する可能性があった。

- (1) 基本は薬材海水の代りに温泉(成分)を投入する。
- (2) 購入した湯の花を溶かすのか、原泉を輸送するのか。

上記の人参湯東耘楼の場合、「思ひ付き」で薬湯を設け、繁昌すると「伊香保より湯の花を取り寄せ」(17.4.8③)、わずか半年で温泉系に乗り換えるなど、「営業改良」(17.4.8③) なる転換を重ねた。

- (3) どこの本場天然温泉を模倣するのか。(店名に天然温泉を名乗る)
- (4) 本場の天然温泉との良好な連携関係をどう構築するのか(原湯の調達、特約や支店形態等)
- (5) どこまで忠実に天然温泉の雰囲気再現するのか。
- (6) 温泉以外の諸機能、諸サービスをどこまで充実させるか。
- (7) 客に本物の温泉と錯覚させるほどの非日常性をいかに演出するか。

木挽町真治軒は「庭園を設け、料亭兼業、府下第一収益の噂」(浴場、p490) が立つほど、「本とうの温泉場のやうに」(9.3.10②) 感じさせた成功例であろう。また新規参入組の築地三益温泉は19年「海水浴と並の温浴との二通りありて…風呂場を異に」(19.1.4③) する複合型で開業、20年7月「海水浴並に囲碁会所開業」(20.7.7④) し、「御余興には囲碁の御慰みもあります」(20.7.7④) と宣伝した。23年不況には「七月一日より大人八厘、小児五厘、ながし五厘、と値下げ」(23.7.9東朝④) に踏み切るなど、競争を意識し新機軸を打ち出し、情報発信面でも際立っており、「大繁昌なり」(19.1.4③) とか「独り非常の大入を占め」(23.7.9東朝④) た好例である。これに対し「湯屋仲間の規約に検束れて下げ度も下げられぬ…近処の湯屋はげっそりと浴客を減され」(23.7.9東朝④) た。

立地条件により、顧客の求めるサービスの内容も千差万別であり、特に非日常性演出では様々なビジネスモデルが構想された。たとえば天然温泉の雰囲気醸し出すのに欠かせないコンテンツとして、a 自然な配列の石と岩、b 池沼、c 小川、d 滝、e 草花、f 涼やかな風、g 緑深い樹木、h 鳥の声、i 草葺きの庵・茶室、j 山寺の鐘、k 借景の山水など

が工夫された。

IV. 疑似温泉への評価

ここでは筆者のいう疑似温泉に関する当時の批判・評論や後年の研究等を新しく登場した温泉場に対する評価という視点で一括して概観しておきたい。なぜなら学術的な観点からの先行研究と見なせるものがあまりない分野だからである。

江戸の薬湯は「毎日湯を汲み改めず、あるひは七日、あるひは十日に湯を替へ、その日は戸口に『今日新湯』と云ふ木札を掛く」（守貞、p121）と衛生上問題があった。明治6年東京府は「近來府下於テ何々温泉ト唱、浴室取設候者有之、格別効能之聞無之候間、研究之次第文部省へ問合候処、素ヨリ湯花或ハ硫黄等ヲ取寄、沸湯致候分ニテ、其効験無之、猥リニ右へ入浴候テハ病症ニ寄り不慮之患害ヲモ生シ候趣ニ付、入浴之者心付候様可致候」（市街、p627）と示達した。「湯花或ハ硫黄等ヲ取寄、沸湯」した疑似温泉の続出を「効験無之」と懸念したものの、許可不要業種のため当該府令では温泉ブームを全く抑制できなかった。

9年「伊豆熱海 露木よしひろ」なる人物が読売新聞に次の投書をした。「東京にて諸方に何処温泉とて諸国の温泉を樽づめにして取寄た湯が有りますが、汚れた湯を砂ごしにしたり、何かして幾度も用ひて御薬湯温泉と有りますが、私の考がへには汚れた湯を幾度も用ひるのは薬には成まいと思ひます」（9.6.9④）

また従前の湯屋仲間からも「此ごろ流行の沃陣湯とかいふ西洋風の湯屋は実に申分が有ませんけれど男湯と女湯の境が…見えて不都合」（9.5.16③）との投書が寄せられた。江戸期に湯屋仲間から薬湯を営業妨害と町奉行に訴えた先例（浴場、p109）と軌を一にする。

外国人からも銭湯における混浴を批判されて廃止を徹底したが、「江戸も薬湯は男女入込と云ひて槽を別にせず、今に至り混浴」（守貞、p121）とあるように、ながらく「薬湯に限り、身体養生の意味から男女混浴は黙認の姿であった」（横浜、p894）ため、規制から漏れた薬湯・温泉系に対し、当局はまず11年2月「薬湯で男女入込をするものが有る様子ゆゑ、猶また嚴重に取締をするやうにと、警視本署より昨日各区長へ内達」（11.6.14②）、さらに同年6月温泉にも「近ごろは並の湯屋の方が男女の境が正しく、温泉は多く境が名ばかりで、甚だしいのは双方とも何から何まで見えるのは宜しく無いことで風俗を乱す元ゆゑ、近々に厳しく成るといひ、また諸方の滝は男女を一所に浴させたが、是も捨置かれぬことゆゑ、程なく其筋よりお達しが出る」（11.6.19②）由と報じられた。取締当局は「並の湯屋」、「諸方の滝」と並び、「近ごろの…温泉」の流行の影響をいち早く察知し、これらを統一的に「風俗を乱す」施設として目を光らせていたことが窺える。

7年服部撫松は「輓近又処々ニ温泉場ヲ開クモノアリ。各諸州有名ノ暄池（ワンセン）ヲ以テ之ニ名ク。曰ク伊豆七湯、曰ク有馬温泉、曰ク何、曰ク何ト。蓋シ其温泉或ハ湯花ヲ汲来ツテ之ヲ湯中ニ和スト云フ」（繁昌、26丁）とする。服部は一連の先駆者として推奨する深川八幡の温泉について、「方今深川ノ仲街ニ開ク者ヲ以テ巨擘トナス…俳優沢村氏新戯場ヲ開カントシテ未ダ成ラズ。故ニ温泉場ヲ開ヒテ以テ仲街之衰勢ヲ挽回セント欲スル也。建築ノ風一妓楼ノ如ク、楼ニ接メ数箇ノ小茶店有リ。各酒肴ヲ弁シ、且ツ絃妓ヲ蓄ハヒ、亦タ花街之茶店ニ異ラス。此楼元トヨリ浴ス可ク、又夕酔フ可ク、又夕能ク睡ル可シ…一楼ニシテ三快ヲ鬻グ者ハ亦新繁昌中ノ一洗旧湯ナリ」（繁昌、35丁）と紹介した。そして沢村による観光デザイン的神髓を「趣向全ク自然ノ暄池ニ擬スル也」（繁昌、26丁）と評した。

9年8月読売が「今年はよくよく滝と温泉か流行」（9.8.15②）と書いたように、10年11月発行の『懷中東京案内 第二編』には東京市内「有名の温泉」が44カ所掲載されている。（懷中、29～31丁）栗林惇蔵は温泉ばかりで各所に出来た結果「温泉場は上野鶯谷の伊香保と磯部、向島の有馬、駒込の草津、池上の光明館、中洲の一瓢亭、浅草の田輝楼、四谷の鞭の湯、金杉の見晴し（之れは隣家に温泉あるなり）等の各所は日曜日等には早朝より浴客充満」（写真、p105）と、繁栄振りを指摘する。

小説家も市内の温泉にしばしば言及する。たとえば永井荷風は「当時都下の温泉旅館と称するものは旅客の宿泊する処ではなくして、都人の来って酒宴を張り或は遊治郎の窃に芸妓矢場女の如き者を拉して来る処で、市中繁華の街を離れて稍幽静なる地区には必温泉場なるものがあつた。則深川仲町には某楼があり、駒込追分には草津温泉があり、

根岸には志保原伊香保の二亭があり、入谷には松源があり、向島秋葉神社境内には有馬温泉があり、水神には八百松があり、木母寺の畔には植半があった¹⁵⁾と金子と重複する店名を多く挙げる。

石井研堂は『珍奇競』に『府下の温泉場七(年)春ヨリ』とあり、斎藤月岑『武江年表』に『七年後、市中処々へ温泉場を開く、何れも座敷を建つらね厨膳茶菓をも售ふ。子年ころより多し』とあり、この子年は明治九年なり。その他温泉開業に関する記載多し(起原、p1226)と具体例を列挙した後に、「市内温泉の流行が数年にてさめ果て」(起原、p1227)たと指摘する。

『明治大正図誌』は20年の「池上温泉場盛栄之図」を掲げ「駒込、池上など近郊にできた新温泉と呼ばれる鉱泉の湧し湯であった。それは、待合よりも手がるな逢い引きの場ともなり、草津、有馬など有名な温泉の名がつけられていたところから、温泉旅行の疑似体験を提供…新温泉は、維新後の東京に流れこんできた寄留者たちに…待合よりも手がるな逢い引きの場ともなり、地方のイメージを提供した¹⁶⁾と位置づけ、「東京近郊の名物となった新温泉場…も、書生がその欲望を天真爛漫に発動させるアソビの空間¹⁷⁾だったと指摘した。

V. 疑似温泉と真性温泉の比較

本物の真性温泉と比べて疑似温泉が劣る要因を克服する手段として実施可能なものは、

(1) 泉度が低く、冷泉に分類されるものを燃料によって一定の温度まで暖める。

野崎左文は市内の「ありふれの温泉」が概ね「薪を焚き炭を燻らして薪を焚き煖め沸す」(漫遊、p382)ものと断じ、浅草観音裏の温泉はこのための「薪の高いので引合ず、終に…八百二十円に売払ひ」(14.4.28③)と燃料費が撤退の理由にもなった。

(2) 有効成分が乏しい点を本場から取り寄せた「湯の花」等で効能を補う。(固形温泉)

「野州塩原の霊泉を取来りて、浴湯を設」(下谷、p233)けた新坂下の温泉「志保原」や、「草津とし云ば、臭気も名も高き、其本元の薬湯を、ここにうつしてみつや町に、人のしりたる温泉あり¹⁸⁾とされた駒込草津温泉など疑似「温泉には伊香保、磯部、塩原を引けるもの多」(金子、p147)く、42年大町桂月は「在来、温泉と云へば必ず指を草津に屈せしも、偶然に非ず。東京に、硫黄花を沸す風呂あれば必ず草津の名を冠するを以て見るも、その草津の効能が世に知れわたりたるを知るべし¹⁹⁾と指摘した。

(3) 景観で劣るのを、立地を選び、樹木を植え、庭園を造り、社寺風建築を設ける等、市中山居を醸成する。

立地としては市街でも相対的に幽静な河畔や境内・園地・林泉隣接地が多く選ばれた。たとえば千昇亭は「吾妻橋際佐竹邸の後」(17.7.12④)に出店した。「大橋際の大橋楼の西洋薬湯が店開き」(9.10.23東朝②)し「在来の家屋を取毀ち更に大楼を新築」(20.8.14④)した万千楼は「更に三層の大楼新築…大広間…座敷向湯殿等まで悉とく出来…眺望宜敷」(20.11.16④)と広告、「家は三層楼の大建築にて大川に臨み水烟の眺望最佳なり。大広間もありて随分多人数を容ることを得れば大集會を催すに適せり」(金子、p126)と評された。

立地に関わらず、敷地内の庭園整備に競って取り組んだ。南本所「官許アルカリ温泉場」は「庭内尤も広く、池あり山あり、池には墨水の流を濯ぎ、山には老木奇石を配植し、春は梅花美人の粧あり、夏は緑陰清涼の風多く、秋は紅葉錦を装ひ、嚴冬古木の雪景等に至りては尤も絶勝と云ふべし…。御厩橋向 南本所外手町十九番地 官許アルカリ温泉場主人敬白」(11.4.10④)と宣伝した。駒込草津温泉は「庭園広闊にして浴客の運動散歩に適し、珍樹奇石数多あり。毎年秋季となれば菊細工の人形を造り客の酒興を添ゆ」(金子、p147)、「萬安」は「庭園広く築山泉水等宛ら天然の趣を備へ」(金子、p148)、有馬温泉も「園内広潤にして風致に富み所々に山あり、池あり」(金子、p148)、「志保原」は「其の境域頗る幽邃」、「伊香保」の園内には台上より桜川、泉川の水を引いた泉水を擁し、上野の山を借景とする中の島を設けて赤橋にてこれを渡るなど数奇を極めた庭園で「明治末から大正末まで「東都随一の料亭」と大いに宣伝²⁰⁾した。

(4) 著名な真性温泉との提携等により、熱海、草津、伊香保、有馬等本物らしい温泉名称を名乗り、雰囲気醸し出した。

一方、疑似温泉側にも本物に比して遜色ないか、場合によってはより優れた要因も以下のように存在した。

(5) 立地条件で都心からの接近性に優れる。

疑似温泉の利用客の感想として「東京中の温泉場でも巡遊て那地へも旅行ずりに居りましょうか」「其遊が一等の得策です。往復の旅費は経らず、良好食て居られますから…」(写真、p110~111)とある。

四谷の鞭の湯は本物の「熱海や箱根を圧してしまふ目論見で居ります」(11.6.29②)、「八百松(枕橋)」は「主人が設けの新浴場、遠き温泉に旅行せの労を省となん」⁽²¹⁾との本物に負けぬ強気が報じられた。

(6) 建物の外観や浴場・浴槽・湯滝等の設備の絢爛豪華さを売り物にした。

建物に投資した例では浜町万千楼は「大連の来客多くして手狭なるより今度新に三階造の高楼を建増し」(20.11.19②)、「三階眺望よし」(懷中、29丁)と宣伝した。跡地の新大橋に立つと隅田川の流れが目前に迫り、当時の人は三階からの眺めをさぞかし満喫したことであろう。伊香保も「一室八十八坪余の楼席を建築…御府下にも他に類なき広間に候へば御大勢様御宴会又は御浚向等の御用被仰付度」(18.12.18④)と宣伝、「二階には四十畳程の大広間もあり…集会には最も妙なり」(金子、p147)との定評を得た。

(7) 料理や接客での独自性、遊興娯楽性の加味など各種サービスを各々考案した。

9年10月「米国紐育サラトガの温泉ふうに松本順先生の調合で開業」(9.10.11②)した万千楼「サラトガ湯」をはじめ「沃陳(ヨジウム)湯」「西洋のシュールバツス」「米国カルルス温泉」などカタカナ名の西洋式を導入して「奇を好む浴客を招き」(浴場、p111)、石井研堂は「ヨジウム湯と銘を打ちたるもの十一、カルルス湯二、アルカリ湯一あり」(起原、p1227)と西洋式の流行を指摘する。

蠣殻町綾瀬川は「平常湯滝あり…運動矢場あり」(懷中、29丁)、「志保原」は「其の料理亦高尚にして」、福住楼は蕎麦に重点を置き「客の扱ひ至って懇切」(金子、p148)、新栄楼は英字紙まで閲覧させる新聞縦覧所を開き(11.10.6④)南本所「官許アルカリ温泉場」も「各種の新聞紙を取り集め、来客の縦覧に備へ、終日倦む事なからしむ…無代にて男湯には香水、女湯には紅白粉を備へ置き申候」(11.4.10④)、本所区石原町「梅の湯といふは男湯には香水等を備へ、女湯は糠は勿論紅白粉を備へ置き、お化粧御随意の上当分景物を差し出す」(24.12.14②)過剰サービスをした。築地三益温泉は「御余興に」「囲碁会所開業」(20.7.7④)、駒込草津温泉は「庭内大運動場並大弓場出来」(22.10.20④)、大宮の温泉宿・藤乃戸は「大釣堀開業」(23.4.9④)した。

(8) 医療・療法等で医師の専門的な支援を受ける。

東京の薬湯はかなり充実しており、「薬湯には必ず薬剤師を委嘱させた」(浴場、p112)時期もあり、猿若町の「吾妻」は「疝気血の道の湯」(懷中、30丁)と婦人病に特化、蠣殻町二丁目の浴場は「海水浴者の為め…多年実験せられたる」(19.8.17④)「松本順先生の調薬された」(8.5.16朝野)点を宣伝し、11年7月17日烏森町の灌漑浴・温泉ひら岩は「東京府病院お雇ひマンニング氏なども常常この法を行なつて」(11.7.17②)と「西洋のシュールバツス」式を標榜し、南本所「官許アルカリ温泉場」は「英国大医丹涅爾先生亜爾加理浴、大槻肇先生調剤。温泉効能皮膚のゆるみ痛風毒いのご腫れ皮はだのよらきもの、きめをこまかくし色を白くする。大人七厘小供六厘」(11.4.10④)などと「西洋医学による薬品混入の文明開化的な薬湯」(浴場、p111)であった。また磯部鉱泉と「上野公園下の医師荻野氏は此二個の病者を診察する毎に入浴を勧むるに何れも好結果を得て帰京せし者が数百名に及びし」(19.7.10③)、東京鷺浜医院は磯部鉱泉に分院を設けるなど、両者は密接な提携関係にあった。(漫遊、p382)また森ヶ崎鉱泉でも40年「地下二百余尺より湧出する」(近郊、p105)冷鉱泉を備えた鉱泉病院が開院した。(40.7.1東朝)

(9) 箔を付けるためか文人・文学者等との交流を深めサロンの位置付けを得たり、活動拠点としての便宜を図る。

鞭の湯は箔を付けるための恰好の伝承物として「此<照手姫>の鬢を譲受け四ッ谷なる鞭の井近くへ移して同所の繁昌を計らん」(15.2.12②)と目論見、簡易なものでは浅草の保寿軒に「碁の会あり」(懷中、30丁)、「伊香保」は「庭内に乾山の墓在り。之元善養寺境内にありしを、同寺移転とともに此処へ移せるものなり。又ここに国華俱樂部事務所あり」(下谷、p233)と美術工芸の親睦団体「国華俱樂部」のサロンにもなった。また芝浦温泉も館主が谷崎潤一郎らに便宜を与え、「谷崎さん達が雑誌新思潮の編集所をそこに置いていた」⁽²²⁾という。

(10) 宿泊施設の兼業。

両国橋「末広亭」は「ミュール湯、下座敷一銭、二階浴衣付二銭、即席料理御好次第。青柳 御泊り客も致し候」(懷中、29~30丁)、鞭の湯は「凡そ二十七間も座しきを拵らへ…泊り込んで湯治が出来る様にし」(11.6.29②)た。新富町の芸妓二人が風俗掛の取締を警戒し近所の「他家では棒が喧しいとて飲食も大抵にして人力を云付け合乗車で

…四ッ谷荒木町の鞭の湯まで行て泊り込んだ」(15.5.24②)などの遊興目的の利用をされた。また元祖草津温泉も20年ころ「新橋柳橋等の花柳社会にて『駒込のお邸行』と云ふ事が流行」(20.11.22②)したが、芸妓の説明では「此温泉は日々華族紳士等が芸妓を連れ黒塗車で繰り込み、何時も門前に数十両の車が供待している様子が高貴の邸に似て居るよりお邸の名を附た」(20.11.22②)とあり、当初の湯治目的を逸脱し、20年代には次第に高級な顧客層の遊興目的に変化したことが判明する。

VI. 温泉料理系のビジネスモデル

1. 温泉料理系のビジネスモデル

疑似温泉浴のみの単体施設に温浴以外の諸サービスすなわち、浴後の飲食提供や、「泊り込んで湯治が出来る様に」(11.6.29②)と考えた鞭の湯の目論見のように、長時間の湯治を可能とする宿泊機能等を追加的に付与することにより、短時間の通過型から長時間滞在型、宿泊型へとシフトさせ、顧客の消費単価を大幅に引き上げることが可能となる。ここで「温泉料理」(金子、p147)系とは「料理の外に温泉を兼ねる」(金子、p147)即ち温泉系と料亭を兼ねるビジネスモデルである。34年刊行の『東京名物志』では「所謂温泉料理と称する者にして此等は大抵旅宿を兼ね」(名物、p292)と、温泉、料理、旅館の3点セットの総合型温泉を基本とみた。6年深川八幡の温泉が「浴ス可ク、又タ酔フ可ク、又タ能ク睡ル可シ…一樓ニシテ三快ヲ齎グ」(繁昌、35丁)例である。岡本金蔵(5年新泉楼開店)も12年淡路町に岡本たま名義で新泉楼(商人、p266)という「温泉と待合茶屋を兼ねた大な店を出し」(14.10.6②)た。蠣壳町綾瀬川は19年「御弁利を計り、大勉強、左の廉価を以九月一日より御下宿仕候。上等金三円五十銭、朝夕御飯、石油、御入浴料共。並等金三円」(19.8.27④)で宿泊兼営を始めた。駒込草津温泉は温泉に加え、「御所望に任せ、摺み料理…何時でも調べ」(13.6.18④)るべく「隣地に料理店を開き」(名物、p293)、さらに「旅宿をも兼業」(金子、p147)、「温泉あり、料理あり、加へて旅館の兼業」(最新、p25)と段階的に3点セットを達成した。逆に有力料亭から温泉への参入では9年会席割烹番付「東の大関」(取組、3丁)万千楼主・安藤仙蔵(商人、p92)の「西洋薬湯が店開き」(9.10.23東朝②)し、「米国紐育サラトガの温泉ふうに松本順先生の調合で開業」(9.10.11②)した。また「庭園広く築山泉水等宛ら天然の趣を備へ」(金子、p148)た即席料理番付「西の前頭三枚目」(取組、4丁)木挽町万安楼も15年「隣家温泉を譲請」(15.4.8④)けた。木挽町には真治軒、常磐湯、双龍亭、日の出湯等同業者が乱立気味であり、経営難に陥った一軒を譲受し温泉に参入したと推測される。

2. 各地名湯の東京出店

今ひとつ温泉料理系の長期存続を支えた要因の一つが伊香保、草津等各地の名湯との提携によるブランド確立である。6年開業の深川仲町万寿楼「湯質は伊豆相模七島温泉」(浴場、p128)の「原湯を海路樽詰めで運」(浴場、p128)び、13年『東京商人録』にも信州温泉中万亭、和倉温泉堀越和三郎、草津藤谷甚四郎の3店など湯質を示した湯屋が登場する。18年日本橋箱屋町熱海温泉入浴売捌処は「湯は熱海温泉を汽船に輸入投入、依て効能は彼地に湯治するに少も異なし」(18.11.18④)と宣伝した。21年塩原温泉鉱泉亭は「湯元君島五郎²³氏と謀り、特約をむすび原湯を直輸入」(21.10.26④)する一方、「近年温泉の流行に随ひ種々の名称を揚げ概ね原素は有名無実にして効験を奏すること稀」(21.10.26④)と同業を批判した。

箱根湯本福住や撰津有馬梶木などは単なる名板貸とは思えず、また東京での名声向上を願った磯部鉱泉のようにアンテナ・ショップとして疑似温泉を積極的に複数配置した例もある。すなわち「浴室に用る磯部鉱泉は内国無比の靈泉にて…該鉱泉は元地と特約し其精純なるを輸送し来り日々白湯と並び仕立て」(漫遊、乙 p7)る根津磯部鉱泉・紫明館は元地の出張温泉場で、17年「鶯谷に温泉の出張所を設け、又根津に出張温泉場をも新設」(漫遊、p379~381)した結果「本元なる磯部村も漸く世の人のために知られ…其名は終に伊香保と併べ称せら」(漫遊、p379~381)れ名声が向上した。同年伊香保も「湯元同志之者共申合せ、地を従来御愛顧の本府上野新坂玉の湯にトし、伊香保元地の鉱泉をひき」(17.5.17④)支店を開業した。また那須温泉小松屋も東京支店を設け、「原泉より樽詰にて持来るもの故、其効能更に原泉に異るなく」(週間、p94)と宣伝した。これらの例では東京への出張温泉場出店が本家温泉の名声向上にもつながり、双方に相乗効果が認められた。

VII. 疑似温泉ビジネスの脆弱性

最後に当該ビジネスが永続できるモデルとはなりえなかった観光資本としての脆弱要因を挙げておきたい。

(1) 一過性のブームに乗った安易な進出であった。

温泉客の会話にも「…当節は最も温泉ばかりで各所に出来ました…貯蓄ないのに戯遊場所の出来るのは困却ます」(写真、p105)とあるように、この頃は異常なほどの温泉ばかりで各所に出来た結果、競争が激化した。

(2) 浴室・客間・庭園・造作等に相応の資金が固定化した。

木挽町双龍亭は「建家温泉器械一式…代金四百五十円也」(11.4.7④)、葉研堀五色温泉明石亭は「風呂場座敷共凡八十坪余、外に二間三間土蔵貸長屋三戸畳建具一式」(14.2.17④)、芝福住楼は「建坪八十坪余、間数十一、雪隠三ヶ所浴室庭木共…代価金千三百円也」(15.8.16④)で売りに出された。「総て山上に建築し、棟数十余あり。建築の巧妙なる百事完備して殆んど遺憾なし」(近郊、p100)と評された池上温泉²⁴は本湯プロ、明ボノ楼、光明楼、西洋プロ、上等プロ、西洋室、上等室、四号室、五号室、奥の湯など十棟近い建物が回廊で結ばれた最大級の規模であった。

(3) 人件費・燃料費・金利等の経費が経営を圧迫した。

浅草の沸かし湯は「薪の高いので引合ず」(14.4.28③)「燃料騰貴のために…経済が取れない」(湯屋、p33)状態で、24年「本所区石原町近傍は近来湯屋営業者多く出来たるに、彼の不景気に引れて何れも共潰れ同様の傾向」(24.12.14②)とある。

(4) ほとんどが個人経営形態をとっていた。

会社形態を採用したのは東京本芝浦鉱泉、有馬温泉弁天等僅かで、芝公園福住楼を魚商・手仙(商い甲、p208)竹内仙太郎が経営したように大半が個人経営形態であった。

(5) ほとんどが1店舗のみで商圏は狭小であった。

例外的に元祖草津温泉が駒込本店、京橋桶町支店のほか、19年千束と南茅場町に支店を開き「支店にて、本店同様温泉の傍ら料理」(19.6.15③)も提供した。熱海亭(13.9.7④)も熱海から湯の花を取寄せ箔屋町、浜町等に outlets した。

(6) 衛生面が大きな課題であった。

築地の温泉は「清潔と養生を旨とし」(19.1.4③)、浜町月の家は「一層清潔にする」(17.9.6②)、横浜海水浴温泉は「見晴しもよく手広にて清潔」(17.6.14②)などの宣伝から考え一般に衛生面に課題があった。

(7) 支援を受けるべき有力金主が存在しなかった。

有力者の支援を得た少数例を除き、恐らく親族等からの零細な資金で開業したものが多いと考えられる。安原一作が華族(旧撰津守)松平義生を説得して「金を出させ、立派な温泉を新築した」(13.10.8③)四谷鞭の湯や、農工貯蓄銀行など複数行と取引出来た東京本芝浦鉱泉などは例外的であった。牛込若宮町土師与右衛門経営の温泉は妹お六の稼いだ金を元手に「母親おすみの郷より五百円借り入れ」(13.12.3③)てようやく開業した。また福山市兵衛も温泉買取資金不足のため愛人のへそくりまで拠出させたほどであった。

(8) 多分に観光資本としての脆弱性が認められる。

大規模な有力店を除き、資力が潤沢でない者が多いと推測される。13年の湯屋商(商人、p266~269)はほとんど『紳士録』(紳、M31)に掲載なく、所得税4円未満の小規模商人層であろう。

(9) 上記の結果として施設の転売・短命性が不可避であった。

こうした観光資本としての脆弱性の結果、施設が転売されたり、数年を経ずに廃・転業に追い込まれるなど経営不安定性・短命性を露呈した現象が数多く散見される。明治初期の東京案内書(注1参照)にその都度収録された温泉名は後期の温泉料理系を除き、常連が乏しく、毎回店名が大きく入れ替わる。調査の不完全性もあるが、やはり業者の短命性の反映と推測される。例えば温泉ブームの12年深川万年町に井戸を掘り新築した草津温泉の場合は湯銭「上り高は日々五六円づつ」(14.1.29④)あったが、「諸道具畳建具一式有形の俵に極廉価にて至急売却」(14.1.29④)された。井戸掘削、造作を借金で賄い、湯銭を超える金利負担に悩まされた結果と推測される。経営難の常態化に加え、さらに一過性のブームに乗った業態転換等が以下のように何度も繰り返された。

(1) 業態変更の例…「人參湯を廃し伊香保より湯の花を取り寄せ」(17.4.8③)た横浜・東耘楼、「奮発をなし白湯を

- 海水浴に変更、或は白湯を人參湯兼用」(24.12.14②)に変更した本所区の各湯屋など。
- (2) 湯質変更の例…新坂「旧磯部温泉跡鉦泉亭」(21.10.26④)は塩原の湯に乗換え。
- (3) 湯質増設の例…浜町月乃家は「今度は又海水冷浴をも設け」(17.9.6②)、築地の温泉も「海水浴と並の温浴の二通り」(19.1.4③)で開業した。
- (4) 移転の例…鶯谷磯部温泉は「手狭の仮屋にて…客を戸外より御断り」(21.10.3④)するため根津大八幡楼跡に移転した。
- (5) 廃業・処分の例…浅草観音裏の温泉は「薪の高いので引合ず、終に此ほど深川辺の材木屋へ八百二十円に売払ひ」(14.4.28③)、芝公園福住楼は「十四年火災に遭遇し、其後、温泉宿を廃業」(浴場、p130)、「代価金千三百円也」(15.8.16④)で売却広告した。
- (6) 譲受の例…上記の福住楼は23年「田川某譲受け、和倉温泉と白湯を営業」(浴場、p495)した。
- (7) 転々流通の例…千束2丁目に「福住と云温泉新設ありて、其後転々して同十九年中駒込草津温泉主人藤谷氏譲受」(新撰、p132)け「駒込の支店とし」(最新、p26)た。
- (8) 夜逃げの例…15年12月「木挽町七丁目『日の出湯(温泉)』主人湯札の売逃げ」(浴場、p492)の例は資金繰りに窮し「十銭に付湯札二十枚」(24.12.14②)など大量に前金割引販売をした揚げ句の夜逃げであろう。

VIII. むすびにかえて

東京の疑似温泉は後に繁華街を離れた幽静な地に出現した遊興娯楽色の強い温泉料理・温泉旅館系を除けば、経営の不安定な、倒産のリスクが避け難い観光業の典型的な特徴を有していたことが判明した。しかし明治初期に大流行した東京の疑似温泉がいつ頃まで存続したのかは大変難しい課題である。筆者のいう疑似温泉に該当する「再生温泉の大多数はおそらく明治末年には衰えてしまったことと思われる」²⁵⁾との山本洋氏の見解があるが、筆者は最後まで存続したのは温泉料理系の業態ではないかと推測している。短命な温泉業者が多かった中、「繁盛のところは殆どが料亭旅館の兼業」(浴場、p130)のところであったからである。金子は具体的な「温泉料理」店として伊香保、草津(駒込、浅草)、木挽町万安、金杉村松源分店、飯田町富士見楼、芝公園福住楼、新福井町福清、向島有馬温泉、池上明保野、根津紫明館、桜木町塩原温泉、金杉新浜芝浦海水浴、本芝芝浜館の14店を挙げる。荷風も金子と重複するが「温泉場なるもの」²⁶⁾の著名な店を多く挙げる。これら存続した有力店については大半はすでに個別に紹介済みである。

『日本案内上』は団子坂の菊人形の衰退に関して、「城北の名物…之も時勢の進運に洩れず、数年来両国橋国技館などに…団子坂は遂に客を失ひ、また何処も同じ地価の騰貴は菊などを作るよりも、更に利益多き方に用ひんにや、菊人形は一軒減り二軒減り」(日本、p192)と記載する。また「明治の末期になると…湯屋の方でも自然に菖蒲や柚を儉約し、菖蒲湯も柚湯も型ばかりになった」(湯屋、p34)と概ね衰退したとの見解もある。能美金之助『江戸ッ子百話』には「熱い湯と言え、もとは東京には所々に草津湯とか塩湯とかの名称で、馬鹿げて熱い銭湯があった。湯銭は普通の浴場の三倍ぐらいであった…明治の末年頃のこと」²⁷⁾とあり、「草津湯」「塩湯」の類も明治末年には「馬鹿げて熱い銭湯」²⁸⁾などとしてなお存続はしていたようだが、もはや並の「銭湯」と疑似温泉との区別は不明確になっていたものかと想像される。

芝の古老の回顧談に「芝日陰町の角先にも塩湯があって、これは大正の初期までやっていた」(浴場、p116)とあり、落合道人氏も「おそらく大正末か昭和初期のころに、「草津温泉」の系譜は絶滅したと思われる。湯銭がふつうの銭湯の3倍もしていたのでは、だんだん入浴する人たちも減っていったらう」²⁹⁾と推測している。また湯滝そのものはさらに長く、昭和12年8月28日「大湯滝 浅草公園 奥の大増 御料理一、五〇ヨリ」(S12.8.28①)との広告があり戦時体制直前までの営業が確認できる。

このように東京の菊人形、菖蒲湯・柚湯、塩湯、湯滝などの観光施設についての終焉に関する幾つかの断片的な証言等をあげたが、疑似温泉も同様な遊興産業として本物の温泉等に押され次第に「客を失ひ、また何処も同じ地価の騰貴は…更に利益多き方に用ひん」(日本、p192)との廃転業があったのであろうが、個別には明治末期から大正初期まで継続した事例も多数確認できる。また薬湯でも少なくとも人參湯は明治末期までの存続が確認できる。温泉料理系も下級財・劣等財としての限界から、本家本元の天然温泉への旅行が容易になった30年代以降は東京に出店する

価値もなくなり、急速に衰退していったものと考えられる。しかし明治末期でも木挽町万安楼、飯田町富士見楼、鶯溪伊香保、浅草千束町草津亭、池上明ぼの楼など温泉料理系の何店かはなお盛業中であった。(名所、各頁) また美術雑誌「国華」を刊行した「国華倶楽部」が大正10年まで置かれた³⁰⁾事実から、鶯谷の「料亭兼業の伊香保は大正末期まで残っていた」(浴場、p130) ことが確認できた。とはいえ資料の限界から経営者の置かれた具体的な状況や、個々の経営の実態まで判明する場合は残念ながら少ない。

岡本綺堂は『温泉雑記』の中で「各地の温泉場が近年著るしく繁昌するようになったのは、何といても交通の便が開けたからである。江戸時代には箱根の温泉まで行くにしても…往復だけでも七、八日はかかる。それに滞在の日数を加えると、どうしても半月以上に達するのであるから、金と暇とのある人々でなければ、湯治場めぐりなどは容易に出来るものではなかった…それが今日では、一泊はおろか、日帰りでも悠々と箱根や熱海に遊んで来る事が出来るようになったのであるから、鉄道省その他の宣伝と相俟って、そこらへ浴客が続々吸収せらるるのも無理はない」³¹⁾と、疑似温泉衰退の背景を指摘する。ちょうど海外旅行の代替として宮崎が新婚旅行先として人気を博したが、海外旅行の自由化以降に急速に衰退した現象と酷似している。

しかし衰退したとはいえ疑似温泉が東京から消滅したわけではない。昭和6年に細川力蔵が創業した雅叙園の旧百人風呂(昭和63年解体)は明治期の疑似温泉を再現した豪華絢爛な浴室で「再生温泉…の延長上にある」³²⁾とされる。細川は神田の銭湯で奉公し、疑似温泉として著名な芝浦の見晴で「旅館の番頭」³³⁾を勤めた後に独立したから、生粋の業界人による疑似温泉の復活といえよう。また『公衆浴場史』は「再生温泉の繁盛のころは殆どが料亭旅館の兼業で、今日のヘルスセンターの前身とみるべき」(浴場、p130)ものと解し、橋爪紳也氏も「この種の『新温泉』の進化形が、戦後に巨大化したヘルスセンター」³⁴⁾との連続性に言及する。

細川に何らかの刺激を受けたと推測される丹澤善利が戦後に考案したヘルスセンターをはじめ、冒頭に筆者も触れた近時の健康ランド、クアハウス、スーパー銭湯、大深度掘削による天然循環温泉等の、新しい疑似温泉のビジネスモデルとの、系譜上の連続性の有無については今後の検討課題としたい。

注

(1) 本稿では金子佐平編『東京新繁昌記 中篇』明治30年12月、p148を単に(金子、p148)というように、頻出する案内書、研究書、新聞等については以下の略号で本文中の()内に直接付記し、本文と新聞発行年の明治の年号は原則省略した。

[研究書] 守貞…喜田川守貞著・宇佐美英機校訂『近世風俗志(四)(守貞謄稿)』岩波書店、平成13年、/湯屋…岡本綺堂「明治時代の湯屋」『新文化』(『江戸と東京』改題)昭和13年4月号、/横浜…『横浜市史稿 風俗編』昭和7年、/市街…「附記 温泉」『東京市史稿 市街篇第55』、東京都、昭和39年、/起原…石井研堂『増補改訂 明治事物起原 下巻』春陽堂、昭和19年、/浴場…公衆浴場史編纂委員会編『公衆浴場史』全国公衆浴場業環境衛生同業組合連合会、昭和47年。

[明治期案内書(発行順)] 繁昌…服部撫松『東京新繁昌記』7年、/懐中…福田栄造『懐中東京案内』同盟舎、10年6月、「有名温泉」44湯『懐中東京案内 第二編』10年11月、/商人…横山錦棚『東京商人録』大日本商人録社、13年7月、/取組…尾崎富五郎編『商業取組評』萬屋孫兵衛、12年4月、/写真…栗林惇蔵著『東京事情筆写真』21年9月、/新撰…『新撰東京名所図会』第三編、東陽堂、30年1月、/漫遊…野崎左文『漫遊案内』30年7月、/最新…土岐秀苗編『最新東京案内記』教育舎、31年6月、/週間…『東京横浜一週間案内』34年、/名物…松本順吉編『東京名物志』34年、/名所…山下重民編『東京近郊名所図会』其十五、『大日本名所図会』第九十号、東陽堂、44年8月、/近郊…武藤銀一『東京近郊遊覧案内』45年5月、/下谷…『下谷繁盛記』大正元年12月、明治教育社出版部、/日本…日下部明國編『日本案内 下』開国社、大正5年。

[会社録等] 紳…『日本紳士録』交詢社、諸…『日本全国諸会社役員録』商業興信所、要…『銀行会社要録』東京興信所、帝…『帝国銀行会社要録』帝国興信所、商…鈴木喜八・関伊太郎編『日本全国商工人名録』明治31年、日韓…『日韓商工人名録』実業興信所、明治42年。

[読売以外の新聞(読売は新聞名を省略)] 時事…時事新報、東日…東京日日新聞、東朝…東京朝日新聞、朝野…朝野新聞 Mは明治、数字は年月日、○内の数字は紙面の頁数を示す。

(2) この分野を最初に紹介した服部撫松が明治7年『東京新繁昌記』の中で深川の温泉を「趣向全ク自然ノ暄池ニ擬スル也」(繁昌、26丁)と評したごとく、本物に似せた擬態の「疑似」の字を使うことも考えたが、「疑」に「似ていて、区別がつかない」「なぞらえる=擬」(『新明解漢和辞典』、p216)の意味もあるため、古来慣用の「疑似」に統一した。

(3) 紋左衛門は『改良風呂』と呼ばれる現在のような開放的な風呂を考案した人物で、神田雉子町に昇福亭というヨージュム温泉を開業。

(4) 非日常性演出方法として千利休に起源する「市中山居」とは、人工物に囲まれた市街地の真ん中に居ながらにして、山奥のひなびた風情を楽しむことをいい、妻恋谷の磯辺亭の場合の如く「幽邃閑雅の庭園あり…人をして別天地に入るの想あらしむ」(20.5.10②)のものであろう。

- (5) 明治13年8月17日、画工西村春太良、板元吉田善太郎
- (6) 「戦前の絵葉書 戦後の絵葉書 楽しめる絵葉書 “ラベル 戦前絵葉書 旅館 ホテル” サイト (<http://ehagakiwotanosimu.blogspot.com/7986.html>) (平成24年11月29日検索)
- (7) 橋爪紳也「千客万来『市中温泉』登場!」『中央公論』平成15年8月、第118巻、第8号、中央公論新社、p171
- (8) 拙稿「明治期近郊リバーサイドリゾート経営のリスクと観光資本家—墨東・向島の鉱泉宿・有馬温泉と遊園・花月華壇の興亡を中心に—」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第12号、平成23年9月；拙稿「明治期東京ベイ・スパ・リゾートへの投資リスク—“奇傑” 木村荘平による大規模観光経営・芝浦鉱泉旅館の興亡を中心に—」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第13号、平成24年3月参照。
- (9) デザインを意匠・造形の狭義でなく、広く着想とか計画の意味で用いて、どうしたら実現可能性が高く持続可能な収益性の高い観光ビジネスに仕上げられるかを思案し、巧妙な仕組みを具体的に設計すること（＝ビジネスモデルの策定）を筆者は観光デザインの主題に置いている。拙稿「“観光デザイナー” 論—観光資本家における構想と妄想の峻別—」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第14号、平成24年9月参照。
- (10) 「浅草田圃草津亭 | 仲間たち | 浅草槐の会」サイト (<http://www.asakusa.gr.jp/shop/kl/>) (平成24年11月30日検索)
- (11) 『虚構ビジネス・モデル—観光・鉱業・金融の大正バブル史—』、日本経済評論社、平成21年3月参照。
- (12) 高島藍泉は明治9～10年、13年8月から読売新聞に在籍。
- (13) 人造滝と疑似温泉とは末広町「松の湯では湯滝と水滝を仕かけて、湯滝は一人前三銭、水滝は一人まへ一銭五厘」(8.7.22①)、浅草田圃・田輝楼は夏季営業の「例年之通湯滝相始め」(21.7.17④)、浅草田圃・草津温泉は季節営業の「湯滝例年通四月十三日ヨリ開業」(23.4.9④)、茅場町・草津亭は「美麗なる湯殿を新設して二条の湯滝を出来へ…肩を打たせ頭を揉ませ」(25.9.2③)、浅草奥の常盤楼は「夏季湯滝を以て聞え」(36.6.29③) するなど、密接に関わった。
- (14) 小口千明「潮湯の偏在性に関する地理学的予察—日本における海水浴普及との関連から—」『城西人文研究』13号、昭和61年、p63
- (15) 永井荷風「上野」昭和2年6月、永井荷風『荷風全集 第十四巻』中央公論社、昭和25年、p67
- (16) 小木新造・前田愛『明治大正図誌 第1巻東京(1)』昭和53年、筑摩書房、p48、101
- (17) 坪内逍遙「一読三嘆当世書生氣質・第十四回」、坪内雄蔵『逍遙選集 別冊第一巻』春陽堂、昭和2年、p175
- (18) 「雪の草津」『桂月全集 第二巻』大正15年、p279所収
- (19) 「上根岸町近傍 第2回だんご寄席 | 図(其の一) 羽二重団子」(<http://www.habutae.jp/event/talk/talk2.php> : 平成24年11月30日検索)
- (20) 野口勝一『新選東京名所図会第十二編』隅田堤の部上、東陽堂、明治31年3月、p22
- (21) 木村荘八『東京繁昌記』昭和33年、演劇出版社、『木村荘八全集 第四巻風俗(一)』昭和57年、講談社、p272～3所収
- (22) 君島五郎(塩原村大字下塩原63)は塩原温泉の太古館・明賀屋旅館主(『旅館案内』第一巻第一号、旅館案内社、昭和15年4月25日、p56)、塩原水力電気発起人、塩原電車取締役(諸 T15下、p75、要 S7役下、p153)
- (23) 「池上温泉場盛栄之図」(前掲『明治大正図誌 第1巻東京(1)』、p48所収)
- (24) 山本洋「『工場』『草津の湯』考—『にぎりえ』注解のうち—」『高野山大 国語国文』8号、昭和57年3月、p142
- (25) 能美金之助『江戸ッ子百話』三一書房、昭和47年、p105
- (26) 「『草津温泉』と一般銭湯とのちがひ。落合道人 Ochiai-Dojin」(<http://Ochiai-Dojin.chinchiko.blog.so-net.ne.jp/2012-02-11>) (平成24年11月30日検索)
- (27) 「根岸及近傍図」の文字情報3 / #170イカホ温泉(伊香保温泉 桜木町2) (<http://nippori-negisi.seesaa.net/article/27927078.html>) (平成24年11月30日検索)
- (28) 岡本綺堂「温泉雑記」『綺堂隨筆 江戸の思い出』河出書店新社、平成14年、p194
- (29) 「目黒雅叙園 東京の建築遺産50選」(www.tokyokenchikushikai.or.jp/tatemonomap/.../t36.htm) (平成24年11月30日検索)
- (30) 遠藤寛夫『先駆者の旗—丹沢善利伝—』千葉日報社、昭和45年、p242
- (31) 橋爪前掲論文、p225